

荒川区が進める MACC (荒川区モノづくりクラスター) プロジェクトは、荒川区独特の多彩な産業集積を活かし、区内企業の顔の見えるネットワークの形成を支援し、新たな荒川版産業クラスターの形成を目指しています。

MACC 通信では、MACC プロジェクトの「今」をお伝えしていきます！

荒川ブランドの新商品づくりが本格展開期へ

第2回MACCプロジェクト・フォーラム開催！

目玉施策2年目の現状と課題を討議

『第2回MACCプロジェクト・フォーラム』が平成19年11月28日にムーブ町屋で開催されました。事業化2年目のMACCプロジェクトの取組を検証しつつ、基調講演とパネルディスカッションを通じて、産業クラスターの先進事例を学習し、具体化し始めた荒川ブランドの新商品づくりの今後の展開などを討議しました。当日は区内製造業をはじめ産学官の約80人が参加し、MACCプロジェクトの事業を加速することを確認しました。

冒頭、主催者である荒川区の西川太一郎区長は、MACCプロジェクトが本格的な事業へと進展し始めたと関係者に謝意を表し、「顔の見えるネットワーク」が着実に構築されつつある。フォーラムを通じて情報交流を深め、ネットワークを広げて、「工都・荒川」の活力を本物にしたい。そのために区は産業振興に一段の力を注ぐ」と挨拶しました。

続いて、関東経済産業局の藤田昌弘局長は、「関東経産局の管轄下で、自治体自らが産業クラスター形成のイニシアチブをとっているのは荒川区だけ。1社単独の企業努力には限界があるが、異業種交流や産官学連携などを進めることで、新しいビジネス展開の道が開ける。モノづくり企業こそ日本経済の担い手であり、荒川区のモノづくり産業の発展を念じて止まない」と熱いエールが送られました。

また、(独)中小企業基盤整備機構の鈴木孝男理事長は、「いまや中小企業政策は世界共通のテーマである。サポートインダストリーを整備し、中小企業のバイタリティーを育てようとの考えは共通している。荒川区の企業の成長が、世界の中小企業の発展につながる。荒川区と中小

機構は支援事業で提携しており、さらに強化していきたい」と述べました。

基調講演

「地域資源を活かした元気企業づくり～東大阪の事例～」
大阪商業大学エクステンションセンター長、東大阪商工会議所特別参与・同中小企業研究交流センター長 湖中齋氏

“中小企業の街・東大阪”の産業集積の特徴は、多様な産業(金属製品、一般機械をはじめ、プラスチック、印刷、電気機器、紙器、衣服、家具など)が集積していること。中小企業の密度が高いこと。歴史のある地場産業(鉄線、金網、作業工具、ネジ、歯ブラシなど)が根付いていること。トップシェア企業や注目される元気中小企業が比較的多いこと。鋳物、鍛造、金型、切削、プレス、成形、めっきなどフルセット型基礎技術が集積していること。民営の貸し工場が発達していること、が挙げられる。

元気企業づくりのために、東大阪商工会議所が取り組んだことの要点は3つ。経営革新へのやる気を引き出す「モ



西川区長



藤田局長



鈴木理事長



会場の様子

チベーションづくり」革新を促進するための「場とクラスターづくり」そして、革新的事業を支援するための「コーディネート」だ。モチベーションを高めるため、広報誌を通じて啓発運動を40年間続け、ベンチャー企業発掘に力を入れ、独自の褒賞制度なども実施した。場づくりとしては、早くから異業種交流や地元大学との産学連携を促進し、展示会などのマーケティング支援事業を行った。コーディネート業務では企業間仲介は勿論、モノづくり推進室を設置して地域ぐるみの取組の盛り上げに力を注いだ。これらの取組を積み重ね、今日なお継続して実施している。

こうした取組の結果として、異業種交流グループが続々誕生し、現在、市内には22のグループが活動中だ。また、東大阪商工会議所に設置している「大学等技術連携協議会」の活動が軌道に乗り、東大阪市のモノづくり拠点「クリエイション・コア東大阪」では近畿地区の14大学との産学連携を実践し、インキュベーション施設や技能伝承センターなどがフル稼働している。現在では新製品や新規事業により急成長する企業が続々誕生し、不況の閉塞感を払拭して新天地を開く企業も少なくない。「東大阪の中小企業が人工衛星を打ち上げる」計画も現実化し、来年夏に雷観測用衛星SOHLA「まいど1号」として打ち上げられる予定だ。

東大阪市と荒川区に共通するのは大都市圏に位置する点だが、最近では都市型の産業集積が変わってきた。象徴的なのは、企業の工場立地が都市から地方へ広がり、産業の空洞化が進んでいること。経済のグローバル化や地価高騰、高齢化などを背景に、都市部では基盤技術層の廃業が増える一方で、新規開業が減少し、地方部では道路・交通網が発達し、情報格差が縮小し、労働力確保もしやすくなってきた。産業集積のメリットが変化して、都市部での中小企業の定住圏確保が重要になっているわけだ。

それだけに、新たな地域資源の発掘と活用策を講じる必要がある。地域も企業も内発型の自己革新努力が基本となる。そこから新たなものを産み出す土壌をつくり、地域ぐるみで起業家を育てるシステムが必要になる。最も効果的な施策が産業クラスターと地域コラボレーションだ。

問題提起

「MACCプロジェクトの現状と課題」

荒川区MACCコーディネータ 豊泉光男

MACCプロジェクトは「顔の見えるネットワーク」を合言葉に、会員企業の交流を広め、先導的プロジェクトとして「健康福祉プロジェクト」を推進中だ。このプロジェクトでは首都大学東京と共に1万人アンケートを実施し、ま



湖中氏



豊泉コーディネータ

た、メタボリックシンドロームをテーマに勉強会を行い、会員企業と首都大学東京健康学部が個別に産学連携して製品開発に取り組んだ結果、4社が新商品を開発した。

現在、参加企業は60社。区内の様々な企業が集まり、新たなビジネスチャンスを広げる取組が動き始めたところ。

今後の事業展開に向けては、ネットワークの充実若手経営者、高専とのモノづくり技術向上支援を検討中。プロジェクト推進体制の構築 推進協議会設立、コーディネータ増員を検討。新たな先導的プロジェクトの構築 大企業との連携支援の検討。MACCブランドの構築 MACC製品のイメージ強化。健康福祉プロジェクトの推進 新たなテーマを設定しタスクフォースを開始する。

産学連携をさらに進め、市場ニーズと会員企業の経営戦略が一致するテーマを選んで新商品開発を進めるといった手法が有効だと考えている。

パネルディスカッション

コーディネータ：

中央大学大学院経済学研究科教授 山崎朗氏

パネリスト：

大阪商業大学エクステンションセンター長 湖中齋氏

大東工業株式会社代表取締役 井上浩氏

松田金型工業株式会社代表取締役 松田正雄氏

首都大学東京産学公連携センターセンター長代理 草間茂氏

東京都立産業技術高等専門学校産学公交流センター主任 吉田喜一氏

荒川区MACCコーディネータ 豊泉光男

コーディネータ(以下C)：MACCとの関わりは？

井上：当社は工業用ポンプメーカー。自社製品を持ち世界中に販売しているが、ユーザーは中小企業が多く、多品種少量の製品だ。区内では大きい方だが、MACCとの関係はこれから。メーカー間の連携(特に金属・機械関係)に関心を持っている。

松田：当社は金型の専門メーカー。金型工業はあらゆる加工組立産業の多様なニーズに対応する可能性の高い仕事だが、途上国などとの競争が激しく苦戦している現況にある。蓄積されたノウハウを生かして事業を拡大し、苦境を打開したいという気持ちは強い。本業との関係は薄いですが、

MACC のメタボ勉強会に参加し、メタボの改善意識を高める中高年向けの「メタボ解消着」を開発した。

C：産学連携の考え方については？

草間：首都大学東京では、産学連携を社会貢献の一環として重視し、地域社会との交流を強め、学内の人材や学習成果のPRを奨励している。今回、荒川キャンパスにある健康福祉学部が勉強会を持ち、区内企業との連携を具体化したことは大きな実績となる。特に、若い先生方の前向きな対応が新商品開発に貢献でき、自己研鑽にもなっている。

吉田：都立産業技術高専と区内企業との産学連携は、1995年に当高専がロボットコンテスト全国大会で入賞し、区の産業展に出展したのがきっかけ。当時、区の仲介で企業の技術相談に乗ったりしていたが、その後立ち消えになっていた。昨年度に経済産業省が全国の高専と中小企業の人材育成を融合する政策を打ち出し、その事業に参加して新たな交流が始動した。今年度からは区の予算で区内企業との技術相談を再開した。人材育成に関しては、当高専独自の教育プログラムを作成し、個別企業への出前講座も行っている。これからは産学連携の機会を増やしていきたい。

C：活力ある東大阪から見て、荒川区の地域活力を引き出すには何が必要か？

湖中：何か仕掛けをしなければ、地域ぐるみの動きは出てこない。スタートする勇気が肝心。動き出せば問題も生じるが、可能性が高まる。地域特性、ポテンシャルを活かして挑戦してみる事が大切だ。企業の意識はバラバラだから、“顔の見えるネットワークづくり”は容易ではないが、人的つながりを広げることは事業展開の基本でもある。忘れていけないのは特性を伸ばすこと。地域のオリジナリティには伝統的なものもあれば、新たにつくり出すものもある。企業にとっては、自分達でつくり出すという積極的気概が欠かせない。それには時間が必要だから、MACC プロジェクトも短期間で成果を出そうとせず、10年くらいのスパンで考えているのではないか。

C：荒川区の産業環境で優れている点は？

井上：「物流」の利便性だ。荒川から製品を配送すると、日本中のほとんどの地域に翌日には届く。製品のライフサ

イクルが短くなっている今日、納期は競争力にも影響するので、物流条件に恵まれる点は経営の武器になる。もっとアピールしてはどうか。このメリットを活かした地域連携を広げることでもできるし、インターネットでの検索に対応するような仕組みもほしい。

C：MACC のこれからの活動に期待することは？

松田：MACC の中で、「集団で作り出す」手法と、「個々に作り出す」手法の2つがあつていいと思う。産学連携から出てくるアイデアに期待している。社会環境、経済環境が変わって、ニーズが多様化している時代なので、個別ニーズに応えるアプローチの仕方が有効だと考えている。当社の本業である金型は、最新の加工機械やシステム技術を駆使して効率的につくり出す総合技術の結晶なので、これをMACC の中に活かしたい。

草間：健康福祉分野で地域内の産学連携が具体的に動いているので、さらに発展させ、連携事業を拡大していきたい。

つい最近、「福祉ロボット研究会」をスタートしたところだ。

吉田：高専の産学連携事業を取り入れて、地域に広げていく方針だ。地域企業との交流を構築して、インターンシップの機会を増やし、出前講座を定着させていきたい。

湖中：木（企業）をしっかりと見ないと、森（地域）が見えなくなる。実情を直視したうえで、地域ぐるみの取組を展開することが重要。MACC プロジェクトも新商品づくりだけでなく、優れた匠の技術を掘り起こすことも必要だし、仕事の受発注をコーディネートする組織があってもいい。様々なアプローチの仕方があると思う。

C：ここでの議論を踏まえて、今後のMACC の方向性は？

豊泉：ご意見を参考にして事業を進めていく。成功事例の中から将来が見えてくる面もあるので、“顔の見えるネットワーク”から生まれた成功事例を積み上げ、次へのステップを導き出していきたい。横の連携を伸ばし、区内の埋もれた産業資源を掘り起こす作業はこれからが本番だ。もう一つ、新製品・新商品開発が成功するには、これを経営の重要課題として位置づけ、専任者を置き、自社のドメイン（企業領域）とタスクフォースを一致させて取り組むことがポイントだと考えている。



山崎氏



井上氏



松田氏



草間氏



吉田氏

。。。MACCプロジェクトの成果。。。

平成19年5月から設置されたMACCプロジェクト専用のコーディネータの活動により、区内企業に対するきめ細やかなフォローが可能となり、新しい活動が次々に誘発され、新商品開発などの成果も生まれつつあります。

MACCプロジェクト・フォーラムでは、これまでに開発された7つの新製品が展示されました。



来場者に新製品を紹介する開発企業のメンバー

【これまでに開発された新製品】

- (1) 運動強度管理装置
開発企業：コオパティブ・コンピュータ・コンサルティング 株式会社
- (2) エクササイズスリッパ
開発企業：株式会社ストロング
- (3) MRI運動実験装置（助手1号）
開発企業：株式会社日興エポナイト
協力企業：有限会社板垣製作所・有限会社箱田織物工場

- (4) セラピューティックベルト
開発企業：有限会社箱田織物工場
- (5) ヘッドルーペ（香月モデル）
開発企業：細淵電球株式会社
- (6) メタボ解消着
開発企業：松田金型株式会社
- (7) メタボマイグージ
開発企業：有限会社板垣製作所

MACCコーディネータ TOMMYの部屋 VOL. 2

荒川骨折物語

10月に入ったとは言え、東京では、灼熱の太陽が容赦なく照り付け、コンクリートとアスファルトからは、熱エネルギーを盛んに噴出している。

昼下がりの一日トミーは、今日も愛車、あらかわ5号に元氣よく飛び乗った。

あらかわ5号は、幾多の風雨を乗り越えてきた。

確かに、イスは少しひび割れ、ボディの錆びもでていますが、まだまだ、若い号車には負けない活力があった。

トミーとは、良い熟年コンビである。

今日の訪問先、板垣さんに向かう。産学連携の製品（MRI用の加重装置）の打ち合わせだ。

さすが板垣社長、日興エポナイトの遠藤さんと見事にコラボレーションして、装置もほぼ完成していた。おまけに、ペシャンコタイヤのあらかわ5号に、おなか一杯の空気をご馳走していただいた。トミーもあらかわ5号も、嬉しくて仕方なかった。

「そうそう、もう一件寄って行こう。」気になっている案件があった。

そう遠くはない町屋3丁目の箱田さんだ。やはり、首都大学からの試作の承認がまだ終わっていなかった。

訪れた工場は、カシャカシャと相変わらず折り紐の機械音が耳に飛び込んでくる。

「豊泉さん、了解とれましたよ。」と箱田さんの息子さん、嬉しい知らせだ。

工場の奥から、社長と奥さんが笑顔で出迎えてくれた。

あらかわの「ものづくり企業の強み」は、こんなアットホームなファミリー感覚がベースにあるんですね。

またまた、「やったー」の歡喜の雄たけびだ。

トミー、ルンルン気分で、あらかわ5号に乗車、帰路に着く、町屋3丁目裏道は狭く、入り組んでいる。

「おっと、大きな車 きましたよ。脇に徐行。おっとー」未熟なトミー、あらかわ5号と店頭で転倒。

お店のご主人「大丈夫ですか？」トミー「大丈夫です。」と起き上がって帰途についた。

程なく終業時間、皆に心配かけたくないの、無言で帰途に着く。いつものバスに乗車、何だか変だ。

「膝に血が滲んできたみたい。左手に力が入らず、痛みがひどく、腫上がってきた。」

急ぎよ西日暮里の病院を探すために、6時過ぎに交番に駆け込んだ。

「そりゃー、今からじゃ、救急車で行った方がいいですよ。呼んであげましょう。」

ご親切な西日暮里駅交番の警察官さんありがとうございます。

「もしもし、福島さん、明日は、出勤できそうもありません。実は、・・・・・・」と上司に報告すると、

「今、目の前に行く救急車ですね。これからわたしも町屋の木村病院にいきます。」と大騒ぎになってしまった。

その後、レントゲンの結果は、幸い左腕の骨にひびが入ることですみましたが、完治には1ヶ月以上かかりました。

教訓「気をつけよう！ルンルン気分と細い路地」



MACC通信第3号は2月発行予定です。

お問い合わせ先

荒川区産業経済部経営支援課

TEL : 03-3803-2311 FAX : 03-3803-2333

E-mail : macc@city.arakawa.tokyo.jp

MACCホームページアドレス

http://sangyo.city.arakawa.tokyo.jp/macc/